

# 手縫いの基礎技術定着を図る条件

—高校生・教員志望学生を対象として—

佐藤初美

## 1. はじめに

高校の専門学科で講師をする中で、高校生は小中学校で学習した内容が定着していないと感じ、特に小学校での学習経験に原因があることが分かった。一方、小学校の現職教諭は、大学生の間に指導に生かせる方法を身につけられなかったことを反省している。そこで本研究は、教員を目指す大学生に、指導にきちんと使える正しい知識・技術を身につけさせる必要があると考え、基礎的な手縫いの技術に対する指導上欠かせないポイントを、習得条件として検討したい。

## 2. 現状調査

大学生を対象に手縫いの既習内容を調査し、本研究で扱う手縫いの技術を選定する。

### 2.1 アンケート調査

平成 29 年 5 月～6 月に行い、本学家庭選修・専攻に所属する 1～4 年生と他教科の学生の合計 210 名を対象とし、手縫いの既習内容を把握する目的で実施した。その結果、他教科の学生と家庭選修・専攻 1 年生は、よく似た傾向を示し、「半返し縫い・本返し縫い・糸こき」などに対し、既習済みのはずであっても学習経験が「ない」と捉えている者が存在することが分かった。

### 2.2 実技調査

アンケート調査の結果を受け、家庭選修・専攻 1 年生を対象とし、初年次演習（平成 29 年 6 月）において技術の指導前に、大学入学時点における基礎的な手縫い技術の習得状況を把握する目的で行った。正しい針の運びができる者は並縫いを除いて少なく、学習経験があっても技術を習得できていないことが分かった。そこで、本研究では小学校の指導項目でもある「玉結び・玉留め・並縫い・半返し縫い・かがり縫い・二つ穴ボタン付け」を扱うことにした。

## 3. 手縫いの基礎的な技術の習得条件の検討

大学生が短時間の練習で指導に使える正しい技術を習得できるよう、指導法を示したプリントを活用した段階的な実験を計画した。指導プリントの効果と、技術の定着に有効な指導上のポイントを検討することにした。

### 3.1 実験準備

教員を目指す家庭選修・専攻 4 年生に協力を依頼し、裁縫が得意・不得意・混合の 3 グループに分かれ、各々が「玉結び・玉留め・並縫い・半返し縫い・かがり縫い・二つ穴ボタン付け」の指導プリントを作成した。各技術に対する 3 種類の指導プリントは、実験 1～3 に用いる。

### 3.2 実験 1：家庭選修・専攻 1 年生に対する実技調査

指導プリントは、技術習得に効果的であるかを見るため、家庭選修・専攻 1 年生を対象に乱塊

法による実技調査を行った。縫い目を点数化し、 $t$  検定により指導プリントの効果に順位を付けた結果、裁縫が不得意なグループが作成した指導プリントは、「玉結び・ボタン付け」のように工程が複雑な技術ほど説明が伝わりにくいことが分かった。被験者の意見も参考にし、技術習得に効果の認められた各技術上位 2 種類の指導プリントを選ぶことができた。

### 3.3 実験 2：高校生に対する質問紙調査

実験 1 で選んだ指導プリントは、どちらの方が分かりやすいかを検討するため、県立高校生活文化科<sup>1)</sup>に通う、高校 1～3 年生 222 名を対象に 2 点嗜好法による質問紙調査を行った。結果はカイ二乗検定を行い、分かりやすい指導プリントを各技術 1 種類に絞ることができた。

### 3.4 実験 3：他教科の学生に対する実技調査

最終的に選ばれた指導プリントにより技術習得が可能であるかを確認するため、他教科の学生を対象に、実験を行った。初めに、学生の実力を把握するため「実技テスト」を行ったところ、「半返し縫い・かがり縫い・二つ穴ボタン付け」等に誤りが見られた(図 1)が、直後に指導プリントを配布して「練習」を行った結果、正しくできるようになった。数日後に、再び指導プリントを見せずに「実技テスト」を行った結果、正しい針の運び方が定着していることを確認できた(図 2)。その後、練習で重視した点をアンケートと聞き取りにより調査し、各技術の習得条件を定めることができた。

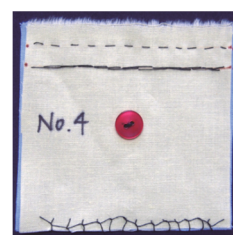


図 1 練習前

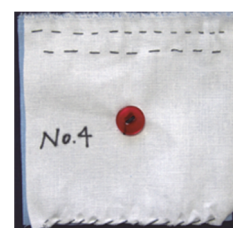


図 2 練習後

## 4. 現職教諭アンケート

本研究は教員を目指す大学生を対象としたため、比較対象として平成 30 年 1 月に小学校の現職教諭に質問紙調査を実施した。その結果、学生よりも衣服の選択眼が身に付いていること、被服実習の指導を通して児童を多面的に育てようと努力していることが分かった。

## 5. 結論

本研究は、小・中・高での被服実習指導に課題があると考え、指導する教員の技量向上の方法として、教員を目指す大学生に指導に使える正しい手縫いの技術を身につけさせることを目的とした。現状調査から、大学入学までに既習済みの技術であっても学習したことがないと思っている者もいること、学習経験があっても正しくできないことが分かった。この問題に対し、指導プリントを作成して段階的に実験を行った。その結果、大学生は技術習得に 1 時間もあれば十分であることが認められた。大学での他教科の学生に対する家庭科の講義は、多領域のオムニバス形式が望ましく、1 回分の授業を被服実習に充てることで、教員となった際の自信と力量を養えると考えられる。本研究で定めた習得条件は、持ち運びに便利なハガキサイズの新たな指導プリントを作成して収録したため、今後効果の検討がなされることを望む。

## 註

1) 生活文化科は、家政系の専門学科である。

(指導教員：加藤祥子 青木香保里)